

川端康成の日本ぽさ

この発表で私は川端康成についてお話したいと思います。川端は1968年にノーベル文学賞を受賞したわけですが。スヴェンスカ学院は「日本人の心の精髓を、優れた感受性をもって表現する叙述の巧妙さ」という考えがノーベル賞受賞を決定したと話しています。日本人の心の精髓を表現すると言うのはどう言う意味でしょうか？川端は日本人の心の精髓を表現しているのでしょうか？もしそうだとしたら「日本人の心の精髓」とは一体どんな物なのでしょう？偉大な人に日本人の心の精髓を表現していると言われたら「日本人の心の精髓」はどう言うふうに再定義されるのでしょうか？1923年から1926年末まで川端が書いた29の「短編小説」の中からこの三つの質問に関係する三つのテーマ「曖昧」、「物の哀れ」そして「若い女の美しさ」を説明したいと思います。私の話を聞きながら皆さんも考えてみてください。

まず一つ目のテーマは描写の詳しさを指します。この三年間に意外なことです。描写のスタイルが短編小説によって非常に変化しています。川端はこの時代に現代風の書き方を使って実験していたとも言われています。ノーベル賞受賞記念講演で川端は一休禅師の道歌を引用しています。

心はいかなる物を言うならん

黒絵に書きし松風の音

この道歌に関して川端はこう語っています：「これは東洋画の精神でもあります。東洋画の空間、余白、省筆もこの墨絵の心でありましょう」。同じように1924年の「港」で描写されている物は町、旅館、家そして船だけです。この小説の中で形容詞で修飾されている物は町だけです。「港町」だと分かります。この場合川端は典型的な物の有り様を描写しています。性格描写の場合は「雨傘」を読むと「港」の雰囲気が大体分かるはずですが。主人公は名前がないし、姿も描写されていないのでとても抽象的で影のような存在です。具体的な描写はどこでしょうか？この曖昧な世界にはいい点と悪い点があります。川端の立場は仏教の禅と深い関係があります。川端は道元の歌を例にしています。

「春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷しかりけり」

川端は：「この道元の歌も四季の美の歌で、古来の日本人が春、夏、秋、冬に、第一に愛でる自然の景物の代表を、ただ四つ無造作にならべただけの、月並み、常套、平凡、この上ないと思えば思え、歌になっていない歌と言え言えます」と語っています。さらに：「ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらいもなく、と言うよりも、ことさらもとめて、つらねて重ねるうちに、日本の真髓を伝えたのであります」とも述べています。さて、ここで皆さんよく聞いてください。この「日本の真髓を伝える」あいまいと言える俳句や浮世絵の美しさはもしかしたらこんな懐かしい紋切り型の表現に気をつけて選ぶことではないでしょうか？川端はこれにたいして次のように主張しています：「私の作品を虚無と言う評家がありますが、西洋流のニヒリズムという言葉はあてはまりません。

心の根本がちがうと思っています。道元の四季の歌も「本来の面目」と題されておりますが、四季の美を歌いながら、実は強く禅に通じたものでしょう。

つまり、西洋流の美学は禅から学んだその墨絵できれいに表されている空間、余白、省筆の価値とは違い、このような「具体的な汚れのない」象徴は西欧の目から見ると空虚だと感じる可能性もあります。しかし、川端が鉄板小説を俳句のような描写を使って書いているので、読者は時々、情報も、感情も、意味も削り取られた在り来たりの決まり文句を読んでいる気持ちになるのです。

次のテーマ「物の哀れ」は川端のこの29の小説によく出てくる悲しさです。この感動的なふさぎ込んだ気持ち説明しにくいですが、日本の「懐かしさ」の気持ちには悲しさも含まれていますので、抹茶のようになんとなく苦くもありまた楽しくもある気分が川端の小説を読んでいる時引き出されます。例をいくつかあげます。「茱萸盗人」の中に出てくる女の人は母を亡くしたばかりで子供からもらった茱萸の萸を味見してその冷たい酸っぱさを感じて故郷を思い出します。「カナリヤ」の男やもめは奥さんを亡くしたばかりで昔の愛人に手紙を書いています。そしてなぜ愛人がくれたカナリアを殺したいか理由を説明しています。なくなった奥さんがこのカナリヤを飼っていたので彼自身の支えにもなっていました。カナリヤは奥さんにお世話になったこととか愛の曖昧さとかの象徴になっています。あら、悲しい。「ばったと鈴虫」の語り手は男の子を見て、この子は多分人生のなかで鈴虫を見つけてもこの事に気が付かずにばったと結婚しちゃうだろうと思います。とても辛らつな比喩ですね。先に私は川端が「私の作品を虚無と言う評家がありますが、西洋流のニヒリズムという言葉はあてはまり

ません」と述べたと話しましたが、こういう風に「物の哀れ」を美しく表して楽しむ事は憂鬱な気持ちに近づく事ではないでしょうか？

三番目のテーマは若い女の美しさです。典型的な物の有り様を表している川端は純粋な女性も描写しています。そして若い女は完全な汚れていない純粋を表しています。「指輪」、「お神事像」、そして「夏の靴」には女の子が出てきます。「指輪」と「夏の靴」の場合には女の子の年は12歳か13歳だと分かります。川端は常に若いことが美しいことに繋がると語っています。このような考えは善の影響を強く受けたからではないかと私は考えています。さらに、文化の精髓にも関係があるのではないのでしょうか？

皆さんはどう思われますか？